元文三年の清水寺縁起Ⅰ

――翻刻『音羽山花之台』――

中前正志

元文三年（一七三八）は、洛東の音羽山清水寺にとって、特別な年だった。『清水寺史』第二巻（音羽山清水寺、平9）第二章第一節「開帳と寺院経済」に、

本堂本尊の居開帳は、寛永六年（一六二九）の焼失直後の三日間の開帳を特例としてはぶけば、元文三年（一七三八）の時が最初である。

と記される通り、最初の本堂本尊の居開帳が行われた年だった。『清水寺史』は、同年の二月十七日～五月二十七日に開帳されたことを清水寺所蔵の『開帳記録』によって示すとともに、開帳の準備がかなり早くから進められていたことも明かしつつ、元文元年九月十六日付の「御開帳定之条々」などを翻刻掲載してもいる。

その『清水寺史』は何ら言及しないが、右の開帳に合わせて清水寺より『洛東音羽山清水寺略縁起』（中野猛氏編『略縁起集成』に翻刻収載）が発行される一方で、それとは別に、同開帳の直前に、清水寺の縁起あるいは霊験譚を記載した縁起書類が、次の通り、寺外においても三点刊行されている。やはり、開帳に合わせてのものであるに違いない。

『洛東音羽山清水寺来験記』

まず、『洛東音羽山清水寺来験記』（以下『来験記』）。三点の中で伝本が最も多く現存し、京都女子大学図書館にも一本所蔵されている（188.215/G99）。同図書館蔵本の場合、刷題簽に外題「元文新板清水来験記」、内題「洛東音羽山清水寺来験記」。全三十二丁。「清水寺は、洛東名勝の地、普門円通の霊場なり。……或人の求により、清水縁起霊験のあらましを誌し訖ぬ。一見の人々、此勝地をしたひ、大悲に縁をむすひ給へかしといふことしかり」と記す「序」の末に

時元文二巳年五月　伏見誠心精舎仰誉記之

とあり、跋文のあとの最末尾に、

元文二年丁巳林鐘上浣
洛下　　書舗蔵版

と刊記が見える。仰誉の著作で、元文二年六月の刊行である。

序の次に見開きの境内図、目録があり、そのあとに内題が掲げられて、全十条（①～⑩）から成る本文が続く。目録には、その十条が

① 清水寺縁起并十景
② 田村丸伝并本堂脇立附鈴鹿山鬼神之俗説
③ 平清盛千日参霊験の事
④ 源義朝の妾常盤母子利生の事
⑤ 主馬盛久霊験の事
⑥ 観音景清か首に代り給ふといふ説の事

⑦　清水利生にて母にたづねあひし事
⑧　清水二千度参詣を賭に打込事
⑨　貧女現果を得し事
⑩　禅勝坊道心を祈て妻を得し事

と示されている。①②だけが創建縁起あるいはそれに関わる内容で、それ以外の③～⑩は霊験譚である。霊験譚が多くを占めている。なお、①～⑩いずれの末尾にも割注の形などで、例えば「以上釈書并清水縁起其外諸書の説也」（①）と依拠資料が注記されており、さらにそのあとに、「評云…」あるいは「弁して云…」として評言を載せる場合が多い。

右のうちの⑥は有名な景清の話だが、その後半は次の通り。

終に梶原に仰て六条河東にて首を刎しむるに、景清が首ならで観音の御首にてあれば、おとろき申上る。頼朝感し給ひ、則御首をつがしむるに、あやまつてうしろさまにつぎぬ。是より世人、清水の本尊を後堂よりおかむ事也、といひ伝ふと。（霊験抄利益集なといふ雑書にしるせり）

景清の身代わりに斬首された本尊観音の首を、誤って前後ろ逆に継いでしまったので、世人が本尊を後堂から拝むようになった、という話。この話には長い評言が付されており、その最初の一段の冒頭部は次の通り。

弁して云。a当寺の観音、いまだ是迄開帳の事をきかず。わるかしこきものともは、本尊の御首うしろむきのゆへに開帳ならすといひ、或は又むかし炎焼にやけ給ひて空御厨子也なんと、いふ（割注略）。かくのこときうたかひをなし、他の信心までをさまたく。一人虚をつたへて万人実を伝ふ也。それ名山霊地も世、にさかへおとろへるならひ、あやしむへきにあらされとも、近年清水の参詣むかしほどになきは、もしやかのから御厨子なりといふやからおほきにや。しかるに、b此度時いたりて、来春開帳の披露有。およそ遠国辺鄙までも聞つたへつげ知らせて、

月日をかそへて来春を相待。されは、清水近辺の旅亭、又は諸方のあき人、放下のたぐひまて、先を競ひ場占して、尺寸の地も嬴なし。思ふに、参詣の中にかの後堂にまいりおかむやうなる馬鹿りちきの族、此度正面なるを拝見せは、却て力をおとし、景清か事虚なれば余の利生とても信じがたし、あるひは此本尊はむかしのにあらすなど、いろ〳〵のうたがひをなし、信心をとりうしなはむ。（下略）

本書が元文三年の開帳を意識したものであることを明確に示す記事である。「来春」すなわち元文三年春に「開帳の披露」のあることが明記されており（傍線部b）、それまでには本尊観音の開帳がなかったことも伝えている（傍線部a）。先の景清の一件あって観音の首が継ぎ誤られたため、あるいは観音が焼失して厨子が空であるため、開帳できないのだ、と噂する向きのあったことや、その故か否か当時は参詣者が以前に比して減っていたことを窺わせる（傍線部aとbの間）のも、興味深い。右記事はさらに、今回の開帳で観音の首が前後ろ逆でなくちゃんと正面を向いていることを拝見した参詣人の中に、観音の首を継ぎ誤ったとする景清の話が偽りならば観音の利生もすべて信じ難いなどと考える者がいるのではと心配し、右引用のあとには、継ぎ誤り自体が言うまでもなく虚説であると主張している。

ところで、管見に入ったうち刈谷市立図書館蔵本の場合は、右の元文二年刊本の序末にあった記事「時元文二巳年五月」がないうえ、先掲刊記などもなくて、本文末に小さく「京極通五条上ル町／藤屋忠兵衛梓行」と見えるのみ。また、本文冒頭部中の「宝亀九年四月」に対する割注が、右元文二年刊本の場合の「今元文二巳年まて／九百六十年になる」と違って「今安永二巳年まて／九百九十六年ニなる」となっており、外題も「安永改正清水寺来験記」（刷題簽）。安永二年（一七七三）に再版されたものということになる。「元文三年より三三年に相当」する同年にも本堂本尊の居開帳が行われたこと、前出『清水寺史』第二巻に記されており、その開帳に合わせた再版に違いない。

『東山清水寺絵縁起』

次に、『東山清水寺絵縁起』（以下『絵縁起』）。『国書総目録』には内閣文庫所蔵本の一本（192/436　和34972）しか著録されていない。同本は、袋綴三巻一冊。上巻十八丁、中巻十六丁、下巻十七丁。刷題簽に外題「清水寺絵縁起」。内題「東山清水寺絵縁起」。柱題「清水」。上巻に十三面、中巻に四面、下巻に七面の挿絵が見られる。末尾の刊記に、

貞享二年
于時元文三年
午正月再板　江戸通本町三丁目　同　源　六
堀川錦小路上ル町　西村市郎右衛門蔵板

とあるから、もと貞享二年（一六八五）に刊行されていて、それが、開帳の直前の元文三年正月に再版されたものであるらしい。また、右刊記の直前に

坂上田村丸は四十六代孝謙天皇天平宝字二年丁酉年誕生而五十二代嵯峨天皇弘仁二年十月十七日薨。万治二年迄八百四十九年歟。
延鎮誕生者四十五代聖武天皇天平元年己巳年也。五十二代嵯峨天皇弘仁七年齢八十八ニ而逝去。万治二年迄八百四十四年也。

とあるので、本書は本来、万治二年（一六五九）の著作ということになろうか。

まず、「夫清水寺の濫觴は、やまとの国高市郡八多郷小嶋寺に報恩といふ大とこあり。……」と始まって、通常よく見られるのと概ね同様の創建縁起が叙述される。そのあと下巻第五丁裏まで、主として霊験譚類が十話ほど列ねられているが、単に霊験譚というのではなく、それと関わって、田村堂・三重塔・西門といった諸堂宇の造営など、種々整備

されていく様子も盛り込まれている。特に注目されるのは、創建縁起部分だけでなく、それら霊験譚類においても、延鎮あるいは田村麻呂が随所に登場し、また、霊験譚類に混じって田村麻呂の漢文伝なども組み込まれている（中巻12オ～14オ）ことである。その点、田村麻呂と延鎮の生没年を先引通り刊記直前に殊更特記することとも対応し、本書が両人を基軸として編述されていることを窺わせよう。

右の創建縁起・霊験譚類は基本的に年代順に並べられており、それらの最後は弘仁四年（八一三）九月の話で、その直後、下巻六丁表の冒頭に

○人皇五十二代嵯峨天皇弘仁七年六月十七日延鎮逝す。齢八十八歳。

とある。そして、一行空け「奥書」と題して、第七丁表冒頭に至るまで、

凡もろこしには、仏神をまつるには筮をたて地を卜して寺社を造る。（中略）山城の一国にも観世音の霊仏あまた所にありといへ共、効験のあらたなるは清水寺にしくことなきは、霊地のゆへ也。（中略）むかしより年〳〵の霊験の奇異なる記録の巻〳〵、今のするにいとまあらす。其草創の三五をしるして画図にあらはし、（中略）坂上の末孫東山清水寺の別当□僧都覚源頽齢八十三誌レ之。

と記す。右の次には二行ほど空けて小さく、

延鎮逝去より三百七十年目文治元年也

とあるから、ここまでは、田村麻呂の末孫で清水寺の別当という覚源による、文治元年（一一八五）の著述だというのであろう。

右に続いては、「追加」と題して有名な景清と盛久の話が載せられ（7オ～13オ）、その直後、第十四丁表の冒頭には、

追加奥書云

建久元年三月十八日清水寺別当僧正覚真記焉。

と見える。「追加」は、建久元年（一一九〇）にやはり清水寺別当の覚真が行ったという。

さらに右のあと二行ほど空け、今度は「続追加」と題して、徳川家光に関する、慶長八年（一六〇三）の誕生から寛永十一年（一六三四）の清水寺参詣までの話を記述し、続いて、「或人問ていはく、千手観音の形状いかゞ」で始まる問答体の記事五条を載せる。そこから数行空いた所に、先に引用した、田村麻呂と延鎮の生没年を記した刊記直前の記事が置かれている。

以上の記事の伝える通りであるとすれば、文治元年清水寺別当覚源の著述に建久元年に同覚真が追加したものがあって、それにさらに近年の話と問答体記事を加えて万治二年に成ったのが本書である、ということになるが、そのすべてをにわかには信じ難い。その点、内容をさらに吟味しつつ別に検討する必要がある。なお、「東寺百合文書」所収「清水寺別当次第」（甲号外/30/17）にも、近年近本謙介氏によって紹介・検討された金剛寺蔵『清水寺縁起』付載「清水寺別当次第」（同氏「天野山金剛寺蔵『清水寺縁起』（漢文縁起）について」〈神戸説話研究会編『論集中世・近世説話と説話集』和泉書院、平26〉等参照）にも、「覚源」「覚真」いずれも見えない。また、国文学研究資料館には、本書の一部を抜萃し、本書にはない跋文を加えたような絵巻一軸が所蔵されてもいる。

『音羽山花之台』

最後に、『音羽山花之台』。末尾に「時／元文第三戊午歳二月　京城下五橋東嬰子愚筆之」、「田村堂」条に「元文三年年」と見えるので、やはり、元文三年二月十七日からの開帳に合わせて著作・出版されたものに違いない。跋文中に「絵図を以導、案内の便とす」とあるように、見開き十面の絵図を提示しつつ、清水寺の創建縁起や諸堂宇などにつき解説・案内し

たもの。「誠に此二仏もわけて霊験一じるしとなり」（7オ）などといった記述も見られるものの、跋文中にまた「利生の数々、世にしれる事ははぶき」と述べるように、霊験譚を特に記そうという意図は見受けられない。創建縁起を掲げたあとに殊更「清水境内寺社／旧跡由来記」と題して（8ウ）、周辺の名所旧跡や境内の諸堂宇などを一つ一つ挙げ記載するので、そうした名所案内記的な性格の方が色濃い。直前に刊行された『来験記』が先述通り霊験譚を多く取り入れているのを、意識した結果であるのかもしれない。

全十七丁。第一丁表は「目録」で、絵があるのは第十一丁表まで。第七丁裏・第八丁表の見開きには、「六波羅野并清水境内」と題する絵図が全面的に掲載されているが、他の箇所には、絵図または絵だけでなく、その上方に文章が綴られている。各々の絵（図）の内容は、およそ次の通り。

1ウ・2オ　大和路絵図＝「和州高市子嶋寺」「子嶋神社」「開山塔」「高取」「土佐丁」「三笠山」「南都春日社」「興福寺」「淀川流」などを画く。

※春日社や興福寺を殊更画くのは、清水寺が興福寺末であったからだろう。清水寺の境内の絵図にも「春日」を画き（9オ）、その解説も載せる（11オ）。

2ウ・3オ　「山城国愛宕郡八坂郷音羽山」へと向かう子嶋寺の賢心。

3ウ・4オ　賢心と行叡の対面・整地する鹿・行叡のあとをたずねる賢心。

4ウ・5オ　雷電して平地が出来る場面・鹿。

5ウ・6オ　鹿狩に来た田村麻呂と賢心。

6ウ・7オ　田村麻呂と夷賊との合戦・矢を拾う童子。

7ウ・8オ　「六波羅野并清水境内」絵図＝「大仏」「五条東」「袋中庵」「若宮八幡」「六波羅蜜寺」「西福寺」「ヲタギ」「六

道」「日吉」「阿弥陀岑」「小松谷」「西ノ大谷」「大谷古廟」「日親ツカ」「遊行報国寺」「むゑんつか」「南無地蔵」「安祥院」「五てう坂ちゃ屋丁」「安井」「かうしん」「八坂塔」「法勧寺」「七くわんおん」「青竜寺」「高台寺」「下河原」「祇園社」「鳥辺山」「日蓮宗」「ウバ堂」「来迎院」「真福寺」「仲光院」「宝とく寺」「鳥辺山ちか道」「三年坂」「轟はし」「霊仙」などを画く。

※8オ左上に「わけきつる袖のしつくかとり辺野ゝなく〳〵帰るみちしはのつゆ　俊成卿」。

8ウ・9オ　清水寺境内絵図＝「子安」「延年寺辻子」「聖天」「六坊」「地蔵院」「馬とゝめ」「執行」「犀門」「仁王門」「春日」「鹿場塚」「しゆろう堂」「轟坊」「経堂」「田村堂」などを画く。

9ウ・10オ　清水寺境内絵図＝「人丸社」「弁天」「カリテイ」「本願」「ふくろ水」「廊下」「獅々有」「朝倉堂」「本堂」「地主社」「めくら石」「竜塔」「宝珠院」「釈迦堂」などを画く。

※「本堂」について、「是本堂うしろのかた也」と注する。

10ウ・11オ　清水寺境内絵図＝「たきの下」「哥中山清閑寺」「高倉院」「虚空蔵」「人宿」「滝之宮」「奥院」「阿弥陀堂」などを画く。

文章は概ね絵図と対応していて、第一丁裏から第二丁表一行目までは序に相当する箇所だが、そのあとは、「大和国高市の郡」の「子嶋の神社」の傍の「子嶋寺」にいた報恩の弟子・賢心が夢告を受け、「淀川」を経て「山城愛宕郡八坂の郷」に至り行叡と逢うところから始まり、田村麻呂の夷賊退治で終わる、一連の清水寺創建縁起が、第七丁表まで続く。その末尾には「凡清水寺建立より已来元文三年戊午迄星霜九百六十年に及べり」と記す。それに続いて、第七丁表の最後三行に「○是より清水境内／有之寺社霊仏／道しるへをしるす」としたうえで、第七丁裏・第八丁表の全面絵図「六波羅野并清水境内」をはさんで第八丁裏に「清水境内寺社／旧跡由来記」と題し、以下、「来迎院」「三年坂」など寺社・名

所旧跡ごとに案内・解説する。先にも触れたが、後半特に「清水寺名所図会」とも言うべき内容になっている。

本書の伝本としては、まず、西尾市岩瀬文庫に二本存する。一本は、原題簽に「絵解京土産音羽山花之台」と外題が印刷され、刊記に「京寺町五条梅村弥右衛門板」とある（84/159）。他の一本の場合、題簽に「清水境内寺社由来記」と墨書され、刊記に「板元／藤屋忠兵衛／袋屋五兵衛／梅村弥右衛門」とある（84/162）。右記概要は、基本的に後者に基づく。また、『国書総目録』によれば、前者と同じものが大東急記念文庫に所蔵されるようであるが、未見。東京都立中央図書館加賀文庫所蔵本（1239）の場合は、題簽に「清水境内寺社旧跡由来記」と墨書。末尾の元文三年東嬰子識語のあとに

安永二癸巳正月求板　梅村市兵衛行
京寺町五条梅村弥与門板

とあり、一連の創建縁起のあとの記事も、先引のものと違って「凡清水寺建立（こん）より己来（このかた）安永二年癸巳迄星霜（せいそう）九百九十五年に及べり」となっているから、安永二年の再版と知れる。「田村堂」条の「今元文三年年」が「今安永二巳年」となってもいる（12ウ）。『来験記』と同じように、本書も、安永二年の開帳に合わせて再版されていたのである。

『国書総目録』に著録されているのはこれら計四本なのだが、同書に記載がないものとしては、早稲田大学図書館千厓文庫に右の加賀文庫所蔵本と同じものが所蔵される（同文庫目録参照）ほか、さらに、右のいずれともまた異なる伝本が、京都女子大学図書館に所蔵されている（188.215/To19）。最近に購入されたもので、袋綴一冊全十七丁。縦二二・四×横一五・九糎。題簽に「清水寺縁起絵入音羽山花之台」と印刷。末尾の元文三年東嬰子識語のあとに

安永二巳春三月開帳
寛政八辰春三月開帳
京都書林　寺町通松原下ル町勝村治右衛門

とある。寛政八年（一七九六）にも清水寺で本堂本尊の開帳が行われたこと知られており、その際に再版されたものである。「凡清水寺建立（こん）より已来（このかた）寛政八年丙辰（へいしん）迄…」「今寛政八辰年」という記事も見える。長く再版され続けたらしい。

なお、右の諸伝本は、京都女子大学図書館蔵本も含めてすべて同版であるようだが、いずれにも内題が見えない。今、岩瀬文庫蔵本等の外題に従って、書名を「音羽山花之台」としておいた。

元文三年に清水寺で本堂本尊の居開帳が初めて催されたのに際して、清水寺より『洛東音羽山清水寺略縁起』が発行されたのとは別に、寺外においても右の通り、清水寺の縁起書類が管見の及ぶ限りでは三点版行されていたのである。そのうち『来験記』と『音羽山花之台』については、『洛東音羽山清水寺略縁起』と同様、元文三年から三十三年に相当する安永二年時のものなど、以降の開帳に当たっても再版されたことが知られた。右二点は特に、近世中期以降に寺外で作成され流通した清水寺の縁起書類として少なからぬ意味を有するであろうし、今一点、元文三年に再版された『絵縁起』の方は、その成立や性格のあり方自体に興味深いものもあって注目される。

また、清水寺という同一寺院についての縁起書類がほぼ同時期に計四点刊行されていたことになるが、右には寺外の三点の概要を確認したのみで特に検討を加えなかったけれども、形式だけでなく縁起の内容においても、それら四点決して同じでない面がある。寺内と寺外における縁起伝承の差異をめぐっては、拙稿「清水寺創建縁起点描②　その後の楊柳観音」（『清水』193、平25）などでも言及したが、さらに、同時に寺外で刊行されたものにも少なからず差異が認められることになる。縁起伝承のあり方の複雑さが改めて感じられよう。

古代から近現代に至るまでの〝清水寺縁起変遷史〟とも言うべきものを構築したいと思うのだが、そのためには、右の三点あるいは四点それぞれのさらなる検討またはそれら相互の比較検討が必要不可欠であろう。小稿は、その手初め

となるものである。

以下に、『音羽山花之台』の翻刻と影印（一部、絵図のある箇所のみ）を掲げておく。

翻刻『音羽山花之台』

・同版ながら従来知られているものとは異なる京都女子大学図書館所蔵本によって翻刻する。ただし、判読不能箇所については他本により補った。なお判読し難かった箇所は□で示し、誤読等の不備と共に他日の補正を期したい。

・基本的に通行の字体に改めると共に、私に句読点や引用符号を施した。誤字などは元のまま。

・半丁ごとの末尾に、『1オ などと記した。

目　録

和州高市子嶋　音羽山開始　延鎮僧都問答　田村将軍鹿狩　清水山大風雨　夷賊高丸軍　六波羅野之絵図

清水一山之図　奥院音羽滝　本堂絵図　経書堂　三年坂　轟之橋　優婆堂

真福寺　宝徳寺　仲光院　地蔵院　仁王門　犀門　春日社

泰産寺　鹿場塚　鐘楼堂　竹林院聖天　轟坊　経堂　三重塔

田村堂　弁財天　朝倉堂　阿弥陀像　毘沙門天　本堂　後門多門天

地主権現　釈迦堂　瀧山寺　奥院　夜叉神　滝之宮　宝珠院

音羽滝　音羽山　坊舎　十景　ふくろ水　めくら石　地主桜

履之古跡　滝之下　右以上『1オ

凡此山華洛のひかし二当て、四時の風景筆舌の及ふ所にあらす。春興などの詠にかきらず、都鄙の遊人常に絡繹跡をたへず。特数品の桜花爛漫にして、殊更名地の風香有。直下の瀑泉清涼なり。九夏のしのぎ爰にしかん。是洛陽の一奇観にして、世人の口実、古今絶ことなし。就レ中犀門に望めば、北山より西を淀・八わた・摂河・和州の岑を遥にし、泉州村里・ふしみ・深草・大仏殿・隣寺細に目のしたに見ゆ。ほとんと『1ウ洛東の景色他に有ことなし。爰に当山の起りは、人皇四十九代弘仁天皇の御宇、宝亀九年の比、大和国高市の郡八多の郷に子嶋の神社有。傍に子嶋寺の住僧報恩師の弟子に賢心といえる僧有。少年よりも出家して六時三昧おこたらず、苦修練行止ことなし。常に報音大士を信敬し、天平宝字四年庚子の比、御長一丈八尺の観世音をつくり、并四天王の像をも此所に安置す。然といへとも未正身の尊影を拝せさる故、大悲願を発けり。『2オある日夢の告を蒙り、仍て宝亀九年戊午卯月八日に先平安城にいたらんとて、淀川迄きたり見るに、一ッの支派をみ付たり。水中に金色一すじの流あり。頓而水源をたづね入へしと、都加茂川に来り、東をさし谷に尋したひけるに、山城愛宕郡八坂の郷音羽川の水上三至る所に、白滝涌出する辺り岸の上に一ッの草庵有。内に白衣を着たる老翁あり。賢心向て曰「いかに誰人ならん哉」と尋しに、「我此地に陰約すること『2ウすでに二百余歳、つねに千手千眼の神呪をたもてり。我名は行叡といふ。汝を待こと久し。幸成哉、汝来れり。此地造堂の霊場也」。又、庭前の株杵をさして曰「是観音の料木にて、過去狗留孫仏の時、霊木千仏種摩の木槌子を植、其種生長したる古木也。我、是をもつて大悲の造材に擬すべしといへ共、未東州に行をはたさざるの故、爰をしばらく去へし。汝我にかわつて此庵に住すへし。我若をそくかへらば、『3オ汝宜いとなむべし。此地練若を建るによし」と云終て、東をさして行玉ふ。賢心も随喜の涕袂をひたし、追求の心尤切なりしかは、期を待てもたへかね、則庵を出て東の方を尋行見れ共しれす。夫より山科東の峯に登けるに、一つの履をひろゑり。取て見るに、うたがふ所もなき居士の沓也。「扨は此老翁は大悲の応現ならん。履を遺は其迹をしめすのみ」と合掌作礼して、本の庵に帰り、遺戒の像を刻とほつ『3ウすれ

共、造功のたくはへなく、三衣の外無し資。荏苒として年月を経る所に、先此山に堂舎を建んと欲するにも、古樹枝葉はびこり、しげり深く、陰森日影をもらさず。旧苔路をうづみ、巖石するどくそばだつて、寸地をもふくるに便あらざる故、ひめもす患ふるところに、ある夜、□□□して、雷の音山鳴谷応じてすさまじかりしか、東雲に望て漸風雨はやみて常の如し。賢心奇怪の思をなし庵を出てみるに、『4オ大樹は谷にたおれ岩石くだけ落て、但堂を建べきに便ある平地自ら出来たり。傍に鹿共死て有。是薩たのつかわしめならんやと、霊瑞の信やむことを得ず、一塚にきづき葬たり。今鹿場塚是也。然る所に、宝亀十一年庚申の比、近衛将監坂上田村麻呂、有時鹿を猟し鳥辺山延年寺の谷をわけ入、滝の流をしたひ爰に来り、一つの草庵を見付、希有におもひ尋玉ふに、賢心、右のことを語れき。田村麿し』4ウじうの物語を聞、感嘆し、造功の旦越ならんと約して、宿所に帰り、妻善高子三善清継之息女也に告る。「自らもとより志有。幸なるかな」とて、夫婦一心に感悦して、則自宅を移して寺となし、皮霊木を切て、賢心報恩の両僧共に千手千眼大悲の像を彫刻し安置せしめ給へり。其後、田村麿上奏して度者一人を申給り、賢心を度す時、改て延鎮と云り。仍而大同年中に諸堂悉成就せり。爰に又桓武天皇延暦『5オ十四年の春、東海より夷賊蜂起して来るよし、都へ聞へけれは、頓而退治を田村麿におゝす。則勅定有、征夷大将軍と宣下せらる。是につゐて田村麿、延鎮僧都に語て曰「我、忝も勅命を承、今度夷賊を征し申ニ付、願らくは貴坊の法力をからずんは、命をはづかしうせざることを得ん」と有けれは、延鎮か曰「心安く思召れよ。我、丹誠をこらしめ大悲の威力をそはしめ奉りなん」と諾す。時に夷賊の大将高丸といふ『5ウ者、はや駿州清見か関に陳所を構ふ。将軍しばらく退て奥州を保。官師、夷賊奴原、鬼神の如くなる荒武者と相戦ふ所に、官軍矢だねつきたり。いかゝせんと案煩ふ所に、何国ともなくおさなき比丘と幼童子二人来り、戦場に立ふさがり、ゐ捨りし矢を悉ひろいとり、官軍にあたへ給ば、将軍是に力を得、終に高丸を射をとし、神楽岡におゐて首を討取たり。将軍恐悦し、則首を帝都へ登し』6オ玉ひける。頓而将軍延鎮にあひ玉ひ、「貴坊の修する所、いづれの法ぞ

や。偏に妙助瑞験、只事ニあらず」と有しかば、延鎮の曰「我法力の内に、しやうぐん地蔵、しやうてき毘沙門の法有。我、此二像を造て供修するのみ」と有は、将軍奇異の思ひをなし、則御戸帳を明て作礼有に、脇士の二尊に、或は矢のあと刀の症所々にみへ、また泥土御足に付たり。将軍大にをどろきて、扨は戦場にて二人の小童子『6ウ 此二尊にてましませしよと敬礼して、この事を帝へ奏し奉りつゝ、延暦十七年七月二日に改て伽藍悉と成就なして、本尊を入奉られけり。則征夷のために造る所の二尊を脇立とし玉ふ也。誠に此二仏もわけて霊験一じるしとなり。凡清水寺建立より已来元文三年戊午迄星霜九百六十年に及べり。

○是より清水境内有之寺社霊仏道しるへをしるす。『7オ

〈7ウ・8オ全面絵図「六波羅野非清水境内」〉

清水境内寺社
旧跡由来記

一来迎院

是経書堂といえり。三年坂の上ニ有。本尊聖徳太子自作の像なり。住僧、常に経木に経を書す。信施の志有は、則小卒都婆に霊名を写し、是をさづく。かたはらの水砵に向ひ法名に水をたむけ帰る。今尚奥院に水向余た有て、こゝに集る。又、北斗堂といふはいにしへ此辺に有し由。今其所を失せり。『8ウ

○三年坂

此坂、大同二年に清水寺建立有て、同三年に此路を開きし故なりといえり。また、上に子安の塔有ゆへ、産寧坂ともいふよし。

○轟の橋

此石はし、三年坂の下にかゝれり。又、ふくろ水の傍なる橋をも云也。

一法成寺

是世にうば堂といふ。経書堂の向ひ也。本尊愛染明王。うばの像有。弘法大師作と云り。奪衣婆の像なり。』9オ

一真福寺

当時本尊は丈六の大日如来像。弘法大師の御作也。同西の方ニ八角に造たる輪蔵有。内に五部の大乗経を納むると也。上下軸にて八角、一方には六字の名号有。江州坂本西教寺真盛上人の筆跡也。廻りに千手観音みだ来迎の絵有。参詣の人、常に罪滅後生の為、是をまわす事也。

一宝徳寺北側也

本尊弥陀如来。行基菩薩の作。浄土宗を『9ウ勤ム。清水境内惣堂也。

一仲光院

本尊随求菩薩。愛染明王を安置す。南側也。

一地蔵院

当院本尊如意輪観音の像也。子安のむかひ北側也。いにしは奥院の辺りに有しか、寛永六年の焼失にかゝり、其後しゆろう堂の後に写す。凡二百年余に及へり。本尊御長三尺余、春日の作也。むかし当山に妙心尼とて有。不断念仏おこたらす、草庵を構住居す。身には麻の衣紙ふすま』10オならて用ひす。一食調斎にして、米銭を貯ず。念仏のおこたるひまなくて居り。折ふし大内に通ひけり。此本尊いつくよりか持来りしか、常に信心不浅、香花灯供養しけり。終に余命限有て、病こと有。七日が程、一心不乱念仏しけるか、本尊ひかりを放し妙心をてらし玉ふとひとしく合掌し、七

十三才にしてりんじう正念に往生をとげけるとなり。其後、しゆろう堂のうしろより今此ところにうつせりと也。』10ウ

○馬と丶め

一楼門仁王門也

是あうんの仁王を安置ス。又、一名那羅延堅固と称す。一方を密迹金剛。

一犀門

是多門天・持国天を安しす。此所、風景詠第一の所也。門に犀をほり物にす。右楼門の南也。

一春日社

和州南都三笠山之四所明神を勧請し、此山にあがむ也。当山は南都一乗院の門跡寺務たり。法相宗といへ共、今寺僧真言を勤ム。』11オ

泰産寺

当寺は是子安の塔ト云。然るに此本尊観世音菩薩は　人皇四十五代の帝聖武天皇の御后光明皇后の安産を、天照太神に祈玉ふに、ある夜、太神宮告て曰「此本尊、昔、仏母摩那夫人の守本尊也。今帝なけきにより幸我朝に渡り玉ひしを、皇妃の難産をすくわしめんため、尚又後世に一切衆生難産の守護仏とせん事しかるべし。尤三重の塔を一宇建、此本尊を納むへし」と告たまゑば、夢さめけるに、御まくらの上にかの本尊おはしましけり。其後、皇后安産有て、満願成就ニ付、天平二年ニ山城国愛宕郡八坂郷轟里に塔を建立し玉ひ、寺号を泰産寺と称し、かの本尊を納玉ふに、折ふし有夕暮に、若僧千手大悲の霊像を負来り曰「当寺宝塔に移し奉り給ふ霊尊は、壱寸八ぶの小像なれは、結縁のもの拝にくし。我今持来りし霊像の御胸の内に納玉へ」と云、何方へ行とも見へすさりにけり。依てかの小像は腹内に納奉り安置し玉ふ。』11ウ 仍而平産を祈るにあらたなること、明也。然は此塔は清水建立より七十六年已前のことなりとぞ。又、田村麿

高子の平産を此観音祈玉ひしと也。

鹿場塚

是右伝記にのする処、延鎮僧都死たる鹿を此所にほうむりし所也と云り。又、坂上田村麿猟せし鹿を此所に埋れしとも云伝へり。

鐘楼堂

是鹿場塚の傍に有。此鐘梵声にして、ねふりをさませり。晩鐘のひゞき尤しゆせう也。謡にも清水寺のかねの声諸行無常といへるもことわりぞかし。

竹林院

是犀門の下に本尊聖天を安置し奉る。此堂近世建るところなり。景清か守本尊有之。又、春日の社傍にも古き石塔に観音有之。

轟坊『12オ

是当山目代慈心院と号す。むかし轟の橋傍に有し故、名付たりと也。近世当院に淡嶋明神又随求大菩薩の像を安置せり。

経堂

此堂に中尊釈迦如来、脇士に文殊・普賢の像を安置す。右方に普大士の像、左方に三十三体の観音の像有。一切経を庫に納有之所なり。

三重塔

本尊東向に大日如来座す。西の方は釈迦・文殊・普賢の絵像を置たり。

田村堂

御図子の内に五尊有。中ニ田村麿の像、前東の方鈴鹿御前、西聖徳太子、後の方東に行叡居士、同西方延鎮僧都の像有。夫将軍田村麿利仁は伝云。田村麿は大納言苅田丸の二男にして、人皇五十二代嵯峨天皇弘仁元年九月、大納言ニ任ス。兼右大将たり。身の長五尺八寸有。身を重軽するニ、二百斤、六十四斤ニせり。いかれる時は猛獣もおそれ、ゑめる時はみとり子もしとふ。終ニ大納言正三位ニ経上り、弘仁二年五月廿三日、寿五十四才にて薨す。山科栗栖野ニ葬す。元来先祖後漢霊帝子孫也。従二位にて贈官有て、挙を得たる人也。官社江州土山ニあがむ。正一位田村大明神ト云。今元文三年乙年迄凡九百四十三年ニ及べり。』[12]ウ

鴟鴞水　傍門ニ広目天・増長天の像有。犀門共ニ四天也。

鳥居の傍に有。手洗砵のこと也。石の水砵。筧の水自ら涌出るなり。いにしへより有しは、むかし千の利休と云る者、是を取て我茶寮の手洗ふ石盆となしけり。依レ之かさねて新につくり、替根石にふくろふを彫付たり。

弁才天社

鳥居北の方に小池を構へ安す。又、訶梨帝母堂。此両堂近世建立也。

朝倉堂内ニ本尊、東ノ方ニ大黒天又千体仏、西ノ方ニ三十三体の観音有。

此堂には、本尊御長三尺の千手観世音・地蔵・毘沙門天を安置す。是はむかし越前の住人に朝倉弾正貞景と云人有。常に観音を帰依する事甚。然るに往古当山の額を論ずること有て、南都山門ととうぜうに及びしかは、終に山門の衆徒諸堂焼。爰におゐて貞景是をなげき、信仰なるによつて、本堂を再興せり。其砌本尊を拝せんと誓ひて御づしの戸を開きけれは『[13]オ忽両眼をしゐてげり。貞景一心に罪障をさんげしていわく「誠や此尊容は余仏とかわり三十三天の密法をも開きたまはざるに、我等いやしき身を以て尊体を開帳せしこと、くやみても猶あまり有」とて三度作礼して、頓而千

手千眼の像をうつしきざみ、此堂を建、本尊をすへけるに、是迄目しゐたるかはたとひらき明かに成けれは、弥信心いやまさりて尊敬おこたることなし。そのゝち寛永六年に焼失有之て、此堂も共に焼たり。然るに堂の地中に石のからひつを堀あてたり。人皆ふしきの思ひをなし、ひらき見るに、黄金の観音の像有。又、鐲古、花皿も有けり。其後、寛永八年ニ堂舎建シと也。右観音、地主社方堂ヲ建。安置ス

阿弥陀像

本堂西に内陳へ入所に有。本尊行基作立像也。世に塩断のみたと称しぬ。

毘沙門天

本堂の内正面の東の方に、御長二尺ばかりの毘沙門天の安置す。』13ウ

本堂

是伝記前に見ゑたり。中尊御長八尺千手千眼観世音菩薩。延鎮僧都の作。中尊両脇には二十八部衆の像を安置し、東方ニ脇立勝軍地蔵、西方ニ脇立勝敵毘沙天を安置せり。其外くはしき事前に出たり。

後門

本堂うしろの方也。東方ニ多門天有。此所鞍馬の毘沙門日々影向の場也。西の方の間ニは当山地主権現の神輿を入奉る。うしろ堂の散銭箱ヲ参詣人ひたとたゝくこと有。因縁いかゞあらんか、世の諺に云ることとるにたらす。

地主大権現社

是当山の地主神にして鎮守たり。御本社そさのをの尊御子大己貴命ヲ祭れり。本地文殊菩薩御紋。神事四月九日。往昔御旅は、麩屋町五条の北ニ有しと也。祭礼には、神輿を経書堂の前に暫居、夫より五条坂六原野八坂の辺を廻りて』14オ本山にくはんぎよなし奉る也。近世旅所を鳥辺山千日林にしはし有てやみぬ。

宝珠院地主社東奥ニ有

此観音は、朝倉堂類焼の時、地より堀出せる本尊也。此所に安置す。

盲目石

地主社左右ニ立リ。目をふさき、石より石へ行当らんとしても違ふこと、怪石也。俗説有之。

釈迦堂

是阿弥陀堂北なる堂也。本尊釈迦の像。右に普大士、左にみたの像有。又、傍ニ十一重の石塔有。是を竜塔といへり。寛永十二年建之。

阿弥陀堂

寺号を滝山寺といえり。本尊丈六の弥陀を安置す。伝聞、円光大師此地におゐて念仏の道場とし給へると也。右の方ニ円光大師、左方ニ地蔵菩薩を安す。近世廿万日の廻向を修し、又、夫より開白有。義瑞師導師たりし也。『14ウ 水手向所、此処に有。経書堂のことく、経木に戒名を写し水をそゝき拝す。

奥院

此地則往古行叡居士草庵の跡也。延鎮僧都、居士の跡に居住して有しに、将軍田村麿にあひ旦契をなしけるも、此所なりとそ。延鎮居士の跡をしたひ、山科音羽川の水上に尋ね入、峯にて履をひろい、是誠に居士は観音の応現ならんとて、則履を持かへり、此辺に埋み古墳を構、朝暮うやまい奉られけるとそ。

本尊座像の観世音ぼさつ。脇に二十八部衆を並へり。右の方地蔵菩薩、左の方に毘沙門を安置す。近世十一年已前、御戸非を開、諸人群拝しけり。或曰、主馬判官盛久、観音の利生にあひし為ニ厚恩一堂を建立せし共云。

夜叉神像（榜ニひんづるの像有）

右奥院堂の前、南のかたに、宮の内有。世俗結ふの神と唱ふは、誤可レ成』15オ

瀧之宮

此御神は、龍王を勧請して龍王の宮と云り。世ニ牛王姫の宮也といふは非也。

音羽滝　　有家　俊恵

（清水ノ滝ヲ読る）名にたてる音羽の瀧も音にのみきくより袖はぬるゝ物かは

（同滝をよめる）をかみするかために妹か見られつゝいつらの心きよ水のたき

（西国順礼うた）まつかせやをとはのたきはきよ水のむすふこゝろはすゝしかるらん

此三筋のたき清冷として、多少なく濁ることなし。誠に大悲の名水なり。世俗曰、是山科音羽川の流、村口にてかはき水つきて地中をくゝりへて、爰ニ出ると云。当山に祈誓しける男女、病人狂人のやから、本堂東の間ニこもり居ること、或七日か内、瀧にくたり水にひたる。奥院本堂を廻りて拝する事三十三度にして、念願を祈る。是を瀧もふてとて、尓今絶ることなし。』15ウ

音羽山

（清水音羽山ヲ読ル）秋かせのふきにし日より音羽山岑の梢も色付にけり　　貫之

当山林木さかしくしけり桜花をゝし。秋は万木紅葉して詠尤よし。名所記ニ曰、山城ニ音羽と称する所三つ有。山科牛尾の流、北白川山中の流、今清水也。（山城名勝志曰）音羽山大津道追分の南にあたつて高き山有。則牛尾の北也。是を云り。

坊舎

当山寺領百三十四石ト有。（執行）宝性院（本願）成就院（目代）慈心院（是轟坊也）（六坊中）延命院　義乗院　光乗院　智丈院　円養院　金蔵院

此分清水犀門のしたに有。同鳥辺山大谷なとへ行細道有。是延年寺辻子ト云。

清水十景

古崖懸泉　春巌開花　音羽畳嫛　霊鷲疎鐘　洛陽万戸　鴨川一帯　東郊烟雨　西門遠眺　岩嶺晴雪　亀阜暮濤『16オ

地主桜

哥ニ音羽の桜をよめり花数多也けふこすは音羽の桜いかにそとみる人毎にとはまし物を

すべて本堂の廻り花をゝし。地主の社辺もあまた也。熊野の諷にも地主権現の花の色といえるも、皆此辺の花成へし。惣じて花は都の名物にて、所々に名花をゝし。謂ル嵐山山さか大ゐ川さくら也仁和寺おむろ也西行桜まつのお山の北ニ有法輪寺さがのこくそう泰山木ひがし山高台寺花之寺にし山勝持寺

権中納言俊忠

くらま山北山近世神社仏閣新に植て詠たへなる地所々ニをゝし。古来の花を爰に沙汰ス。

行叡居士履之古跡

山科の東北に牛尾山法厳寺と云寺有。行叡居士、此峯に我はける履をのこし留給ふ地也。延鎮此所にてひろい帰り玉ふ也。京より行程二里斗也。此山の本尊千手観世音、脇立不動・毘沙門天也。天智天王御作と云り。仍而此所をさして清水奥院といふ。山の谷に流るゝ川を音羽と云。山科の大宅の辺在ちかく『16ウ迄水流て、是より水かれてなし。地にひけるやうにみゆ。右にのふることく、清水のたきゑながれ出るなといふこと諺にさたす。扨寺の額は弘法大師筆跡と也。廃壊年ふるし。近世広瀬氏某再興有。南都招提寺の安養院実存中興第一世とす。山科小山村といふ所、白石明神同白石庵とて有。是より登るほと廿四町有。又、此山に金山堀し跡二ケ所有。経岩名石也。後の高き山にのぼり見れは、江湖の風景目のしたに見ゆ。然れとも常に都の参詣稀にして、堂舎もあれ甍破霧不断焼レ香、扉落月常住挑レ灯。旅賊のやどりともなりしことゝかや。又、近世時行して諸堂を修覆して参詣も有之事也。

瀧之下

本尊虚空蔵を安置す。寺を南蔵院といふ。慶養庵・慶閑・栄春・教海、此処座敷を借ス寺也。霊仙・円山に同じ。瀧の下より歌の中山清閑寺へ三町程有。又、本国寺山小町寺、此辺也。小松谷も近シ。東へしる谷越・山科・だいこ・大津道也。』17オ

今此一冊は、鄙の土産にもと、絵図を以導、案内の便とす。諺に言事、まゝをゝし。仍而真偽をゑらひちりばむる也。奥儀は寺々縁起に順ふべし。然るに、利生の数々、世にしれる事ははぶき、ひとへに遠近まで尊信あらんことを願ふのみ尓云。

具一切功徳　慈眼視衆生
福聚海無量　是故応頂礼

時
元文第三戊午歳二月

京城下五橋
東嬰子　愚筆之

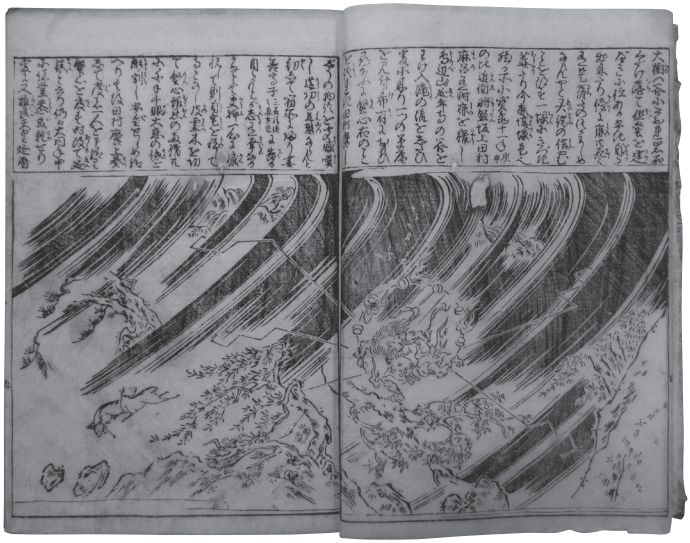
元　板　藤屋忠兵衛
袋屋五兵衛
梅村弥右衛門』17ウ

影印『音羽山花之台』（絵図十面）

2オ　1ウ

3オ　2ウ

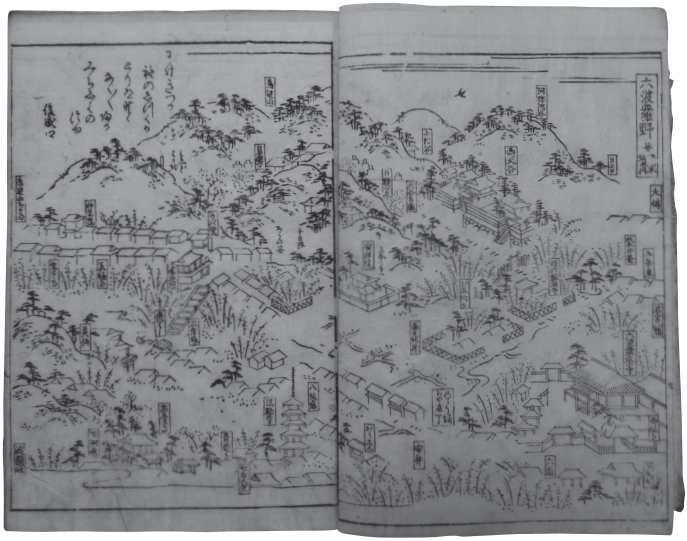
4オ　　3ウ



5オ　　4ウ

6オ　5ウ

7オ　6ウ



8オ　　7ウ

9オ　　8ウ

10オ　　9ウ

11オ　　10ウ